

ことわざ鉱脈の発掘法・序  
-ことわざ／ことわざ類を見出すためのヒント-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 政信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19120">http://hdl.handle.net/10291/19120</a>

## ことわざ鉤脈の発掘法・序

— ことわざ/ことわざ類を見出すためのヒント —

山 口 政 信

### はじめに

本稿は、新聞記事の中から、伝承ことわざやことわざにふさわしい文言を発掘するための序論である。

ことわざやことわざ類を抱く文章には、何らかの形式的な秘密があるのではないか、という漠たる思いがあった。そして、前置語や後置語を含め、ある程度の決まり文句やキーワードなどの類型を呈示できたなら、新たなことわざ研究や教育の手法が見出せるはず、と考えてきた。そこで、これまでに集積してきた新聞記事を類型化して解説を試みることにした。

とは言え、採用した事例はわずかで、未だ緒についたばかりである。したがって、今後の集成に向けた一つの踊り場でしかないことをお断りしておかねばならない。

なお、本稿中の【解説】にいう〈本文〉とは朝日新聞から採取した記事であり、〈主文〉とあるのは太字で表記したことわざやことわざの類を意味する文言のことである。夕刊との記載がない場合は、すべて朝刊からの転載である。《 》で示した句は筆者が改作したことわざである。敬称は省略した。

## 1. ことわざが抱えるジレンマ

ことわざの数は5万とも6万とも言われているが、それは文字化された世界のことわざのおおよそを述べたのに過ぎない。口承文芸であることわざは、話し言葉の特性により生成と消滅をくり返しており、実体を把握することは不可能である。

ましてや、ことわざ研究をいっそう面白くしている創作ことわざが市民権を得た現在においては、ことわざは無限にあると言ってよい。このため、伝承ことわざを狭義のことわざとし、創作ことわざを広義のことわざという考え方が定着しつつある。

それはともかく、新聞紙上から既知の伝承ことわざを抽出することは、注意して読めばそれほど難しくはない。しかし、知っていることわざの数は極めて限定的である上に、未知の伝承ことわざは数知れず、辞書には見られない創作ことわざの類に至ってはお手上げである。

しかも、ことわざとは何か、という難問には多くの学者が取り組んできたが、未だに決定的な定義を見出すには至っていない。その主因は、ことわざを最も強く規定してきた伝承性にある。つまり、ことわざの伝承性を逐一検証することは、現実的には不可能なのである。しかも、他の要因と組み合わせてみると、「あちらを立てればこちらが立たず」となり、袋小路に入ってしまうことになる。

この伝承性には、時間的要因と普及的要因がある。これらにはことわざが生まれた起源（時期と場所）に加え、ことわざが人口に膾炙<sup>かいしよ</sup>している期間（経時性）と、広まっている範囲（地域性）が複雑に絡まっており、すべてを特定することは絶望的と言えよう。

さらに、インターネットで結ばれた現在の情報は、瞬時に世界に知れ渡ることを考慮しなければならない。W・ミーダー<sup>1)</sup>は、情報がネットを駆け巡

る現状に鑑み、ことわざと認められる時間的要因は、今や1年あれば十分であると見ている。地域性については言わずもがなである。したがって、既成概念としての伝承性にこだわっていると、ことわざ研究は自縄自縛に陥りかねないことから、ことわざを再定義する時期はすでに到来していると言わざるを得ない。

その再定義を促す際には、ことわざ研究における2つの立ち位置を知っておくことが望まれる。その第1はことわざ収集 (paremiography) であり、第2にはことわざ学 (paremiology) がある。本稿は、ことわざを収集するという意味からすれば前者であるが、ことわざの意味やその関連性を紐解くことに光を当てれば後者となる。

いずれにしても、両者は〈コインの表裏〉に過ぎず、大局的な観点からすれば同源である。このことから、広義のことわざ学の中にことわざ収集と狭義のことわざ学が含まれている、と考えるのが妥当であろう。

何事によらず、視点や切り口によって軽重は変わるが、両者を天秤に掛けることが本稿の目的ではない。また、骨組みを作りながら肉付けするといった分類を試みるという段階にあることから、採択した文言は広義のことわざ学によるグラデーション的な色調にならざるを得ない。

これらのことを踏まえた上で押さえるべきは、〈ことわざの3S〉である。これにより、ハウエル<sup>2)</sup>の言う①鹹味 (salt)、②簡短 (shortness)、③意義 (sense) の3要件を下敷にして論をすすめることとする。

## 2. 伝承ことわざを内包する文章

現在、基本となる伝承ことわざの数は約300句で、新聞紙に掲載されることわざはこの範疇<sup>はんちゅう</sup>にあるものと思われる。その内で、常用されているのは150句ほどであろう。

### (1) ことわざと明記されている句

この事例におけることわざは、誰もが容易に見出すことができる。しかし、掲載される頻度は決して多くない。おそらく、あえてことわざと断るまでもない、との判断がはたらいっているものと考えられる。また、文章のリズムが崩れ、野暮ったくなることが影響しているのかもしれない。

- ・芸は身を助ける、ということわざがあります。(06.6.28 投稿)

【解説】 見てのとおりであり、論議の余地はない。

- ・「山が高いからといって引き返してはならない。行けば必ず越えられる」。

白鵬がしばしば口にする母国のことわざである。(2017.7.22 天声人語)

【解説】 多くの場合、外国の句には国名とともにことわざという表記が見られる。本文には母国とあるが、白鵬がモンゴル出身であることは誰もが知るところである。しかも、天声人語の書き出しの部分にモンゴルとの文字が配されている。このことから、国名が重複することを避けたかったものと推測される。

### (2) 鍵括弧で括られている句

話し言葉、書き言葉に限らず、引用や強調する場合の文言は鍵括弧で括る習慣がある。この鍵括弧内の文言が、①短い、②口調がよい、③意味がある場合には、それがことわざではないかと推し量る最も重要な指標になる。この様式は伝承ことわざに限るものではない。

- ・それは案外、「三つ子の魂百までも」の現代版なのかもしれない。(2017.6.14 天声人語)

【解説】 限られた字数で文章をまとめるには、人口に膾炙したことわざは

適役である。天声人語には譬え話がよく顔を出し、まるでその全体がことわざのようであることから、書き出し部分から本題を類推することは、楽しい知的作業となる。

さて、本文には〈案外〉という前置語があることによって、ことわざというまとまりのある文言が続く気配が漂っている。さらに、〈現代版なのかもしれない〉という後置語で締めくくられていることから、鍵括弧内の主文が過去の何か、伝承性のある文言、伝承ことわざではないか、との類推を可能にしている。

- ・「**李下に冠を正さず**」は、為政者に求められる心構えのはずだ。これではまるで、スモモの木の回りに煙幕が張られているようで、不透明この上ない。(2017.5.31 天声人語)

【解説】〈李〉はスモモのこと。主文は「瓜田に履を納れず」との対句である。本文中の〈心構えのはずだ〉は、鍵括弧書きされた主文がよく知られていることをほのめかしている。そして、さらに続く〈これではまるで〉によって、主文が譬えであることを暗示している。

また、〈スモモの木の回りに煙幕が張られているようで〉に見られる〈よう〉は、〈如し〉と同様に注目すべき文言である。この説明文が、鍵括弧内の主文をことわざであると保証しているようなものである。同時に、〈よう〉という譬えが用いられた説明文は、「走り馬の草を食うよう」がことわざであるように、それ自体がことわざとして通用するほどの言語力を有している。

このように、ことわざをことわざで説明する入れ子様式になっている本文は、鍵括弧内の主文がことわざであることを力強く補強している。

- ・当節流の「**李下に冠を正さず**」。将棋の対局中はスマホを持たず、むやみに離簾せず。竜王戦挑戦者が出場停止に。(2016.10.13 夕刊 素粒子)

【解説】主文は活用力が強く、使用頻度の多いことわざである。前例とは

重複するが、本文はたまたま拾い上げたまでの記事。

さて、「当節流の」という前置語が何らかの流れ、固有の方法や方式、仲間・類といった存在を暗示している。つまり、主文がことわざであること  
の先導役を果たしている、と読み解くことができる。《対局中、スマホは持  
たずやたら離れず》を標語にしておくのも一計である。

- ・「虎の子」に育った半導体事業を東芝は売却する。原発事業で抱えた巨額  
の損失を穴埋めするには、背に腹はかえられないからだ。(略)かつて日  
本の半導体は「産業のコメ」といわれ、政府もその育成を支援した。(堀  
籠俊材 2017. 4. 11 風聞風問)

【解説】 本文は3つの形式を有する、埋蔵量に富んだことわざの鉾脈である。冒頭の「虎の子」は鍵括弧で括られている上に、後置語の〈育った〉からは主文がことわざに昇華していることが連想される。

2つ目の〈背に腹はかえられない〉は、文章の流れに乗せるための方策として、後に記す(4)の形式、つまり元句の「かえられぬ」が〈かえられない〉に変えられている。しかも、鍵括弧は施されていないため、元句を知らない者にとっての抽出は難しいかもしれない。その一方で、後置語の〈からだ〉が理由を示唆しており、主文は筆者の言う〈からだことわざ〉(身体部位等を用いたことわざ)であると判断できよう。

これらの2句はいずれも伝承ことわざであるが、前者には鍵括弧が付き、後者には付いていない。このことから、執筆者は〈背に腹は変えられない〉を用いて「虎の子」を強調したかったことが窺える。

3つ目の「産業のコメ」は、第3章に入れるべき文言である。伝承ことわざではないが鍵括弧に括られた比喻に富む短文であり、後置語にはことわざ発掘法で注目すべき〈といわれ〉が付されている。これにより、この主文は社会的承認が得られている文言であることが示唆され、ことわざとしての可能性を読み取ることができる。

- ・獅子舞も頭の部分を扱う人によってうまさが決まる。「獅子も頭の使いがら」で、かしらに立つ人の操縦策がものを言う。(品 2006.1.4 夕刊 経済気象台)

【解説】 主文は鍵括弧で囲まれた、切れのよい短文である。また、その直後に見られる〈で〉は、〈であって〉と同様に理由を示し、主文を浮彫にする形をとっている。「窮すれば通ず」で」といった様式は、日常生活の随所に見られる。

- ・賞を着せれば「馬子にも衣装」なのだろうか。昨秋に発覚した日展の不正審査といい、「賞ビジネス」が目余る。(2014.2.19 天声人語)

【解説】 後置語の〈なのだろうか〉により、鍵括弧で括られた主文に強い意味があることを暗示している。なお、「賞ビジネス」にも鍵括弧が付されているが、これは単に show と賞を掛けた造語を強調するためのものであり、ことわざとは言い難い。

- ・「地獄の沙汰も金次第」とはよく言ったもので、今やありとあらゆるものが、お金で買えるご時世です。(2012.7.7)

【解説】 本文中の〈とはよく言ったもので〉は注目すべき後置語である。これにより、鍵括弧に囲まれた主文が日常茶飯に用いられている、理にかなったことわざであることが示唆される。

- ・「日常生活では『あうんの呼吸』など人間関係を円滑にする潤滑油になるので、必ずしもいけないとは思わない。」(2017.4.17 オピニオン)

【解説】 本文は、「潤滑油か あしき習慣か」という見出しの下で、<sup>そんたく</sup> 忖度をめぐる読者の長い意見表記の一部を切り取ったもの。本文のすべてが鍵括弧で括られていることから、二重鍵括弧をもって強調された短い主文は、特別の意味が付された文言、すなわちことわざであると判断できる。



- ・孫子の兵法は「彼を知り己を知れば百戦あやうからず」。しかし、彼を知れば知るほど恐ろしく、魅力的な「敵」だ。(斎藤勝寿 2006.5.28)

【解説】 前置語において出典が明記された主文は、鍵括弧で括られた戦略的な短文句につき、ことわざであることは一目瞭然である。ここで言う彼とはブラジルのサッカー選手、ロナウジーニョのこと。

### (3) 独立した文言として記されている句

- ・熊楠が生態系保護に心血を注いだ神島が、快晴の海に輝いて見えた。大賢は愚なるがごとし。知的探究心もさることながら、人を魅了する磁力もけた違いだったのだろう。(2017.5.12 天声人語)

【解説】 主文は口調がよく意味のある独立した短句である。加えて、〈ごとし〉とあるように、後に示す(5)にも該当する表現であることから、主文がことわざであるものと推理できる。

### (4) 変形して文章の中に落とし込まれた句

- ・小異を捨てて大同についたということだろう。(2014.2.29 社説)

【解説】 元句は、「小異を捨てて大同に就く」(「大同小異」)もしくは「小を捨てて大に就く」。パロディではなく、話の流れに沿った語尾変化により、〈就く〉が〈ついた〉と改変された例。末尾の〈ということだろう〉という後置語が、主文のことわざらしい力強さを印象付けている。

### (5) 「ごとし」という表記が用いられている句

先の(3)において、主文が〈ごとし〉で結ばれている例を示した。このように、同一や類似、類推や婉曲な断定を意味する〈ごとし〉で結ばれている句からは、かつてことわざが「譬え」と呼ばれていた頃の残りが想起される。この譬えや喩えと称される比喩は、ことわざの重要な要素であり、比喩がなければことわざではない、とまで言い切る学者が存在するほどに大きな位置

を占めている。

- ・たとえば「あいた口がふさがらない」とか「過ぎたるは及ばざるがごとし」を絵で解くとどうなるか。(天野祐吉 2007.9.25 CM 天気図)

【解説】 成句やことわざの絵解遊びを、学校で奨励したいとする文言。2つの主文は〈たとえば〉の前置語に導かれ、鍵括弧書きされた短文句である。条件が同じ2番目の主文は〈ごとし〉で結ばれていることから、最初の句よりもことわざであるとの判断は容易であろう。

#### (6) 「よう」が挿入されている句

〈よう〉には比喩機能があり、〈如し〉とは「瓜二つ」のはたらきがある。言わば両者は「瓜を二つに割ったよう」なものである。

- ・30～50ミリは激しい雨で「バケツをひっくり返したように降る」(小川崇 2016.9.3)

【解説】 鍵括弧に入った主文は、比喩を用いて雨の強さや降り方を定義した短文。審美的な観点からは〈よう〉で結んでおきたいところである。ちなみに、1時間に20～30ミリは強い雨で、「どしゃ降り」と表現されている。ことわざには「降れば土砂降り」がある。(3章第2句参照)

#### (7) 教訓や格言、家訓などと記されている句

ことわざと上記のような小見出しとの境界は曖昧である。その理由は、いずれも〈ことわざの3S〉を備えていることによる。

- ・禅には、「動中の工夫は静中に勝ること百千億倍」という教えがある。(大島具視 2017.6.26 夕刊)

【解説】 ことわざには〈教訓的〉というニュアンスがつきまわっているが、

「中らずと雖<sup>いえど</sup>も遠からず」である。本文にはその意味における〈という教え〉と記された後置語が、鍵括弧に囲まれた主文に続いている。前置語の〈禪には〉も、主文を教訓性の高いことわざに仕立てる役割を果たしている。

- ・「メッセンジャーを殺すな」という格言が欧米にはある。(2017. 6. 16 天声人語)

【解説】 後置語に〈という格言〉の表記が配されている。さらに、ことわざにふさわしい命令調の主文を鍵括弧で囲むことによって、『プルターク英雄伝』の故事が強調されている。

- ・家訓にいわく「水の流れに抗せざるが如<sup>ごと</sup>く生きよ」。(2017. 5. 22 天声人語)

【解説】 前置語の〈家訓〉と〈いわく〉の先導により、鍵括弧内の主文がことわざにふさわしい文言である、と判断できる。また、主文中に〈如く〉と記されていることも選出の材料となる。(本章(3)(5)参照)

- ・「井戸を掘るなら、水が湧くまで掘れ」。福田首相の施政方針演説で引用され、有名になったこの言葉。明治時代の秋田の農村指導者、石川理之助の格言だ。(2008. 9. 4 青鉛筆)

【解説】 主文は鍵括弧で括られた命令調の独立した短句である。本文末の〈格言〉との文言も発掘のシグナルとなっている。なお、主文は「井戸を掘るなら水の出る迄」のように、短縮された句としても知られている。

### 3. もじりを内包する文章

もじりは歌詞や文言の一部を滑稽や寓意をもって言い替えたもので、パロディーという表現でも用いられる。その元句は汎用性の高いことが前提にあ

ることから、ことわざはもじりの格好の材料とされてきた。

もじりが笑えるのは元句との間にズレが生じているからである。その卑近な例がシャレ（洒落）で、活用される言葉の要件は以下になる。①母音が同じか似ている、②音数が同じか近い、③意味が異なる。

この3点の内、①と②は元句との同質性に基づく反復的な再構成であり、③は元句との異質性に基づく普及度の高い文言であることが欠かせない。

このように、もじりは規則に添って部分的に間違える装置であり、質作のように本物であることを主張するものではない。もじりは元句との間にズレと重なりという二重コードを設定し、笑いを仲立ちとした元句との共存関係にある。つまり、改作句とことわざとの間にズレによる摩擦が生じ、その熱による気づきの橋が架かることで笑うのである。

・「ずいぶんトゲのある言い方してるなあ……」と私が言うと、一緒にいためい(5)が、「あ、知ってるよ。「ウニふたつ」っていうんでしょ」(仙台市・確かにトゲがあるけれどね・40歳 2010.9.25)

【解説】 話し方がそっくりの母娘が、スーパーで言い争っている現場を見た5歳児の発言が鍵括弧書きされている。「子は親を映す鏡」を地でいく光景をまのあたりにし、自信に溢れた間違い発言が興を添えている。元句の「瓜二つ」とは語呂（語路）合わせになっている。話し方のトゲとウニのトゲを掛けた母親のコメントにも座布団を一枚。

・雪慣れぬ寸雪の国に「降れば大雪」の気候変動は脅威である。(2014.2.10 天声人語)

【解説】 “It never rains but it pours.”（「降れば土砂降り」）が元句。主文をことわざであると判じる理由は、鍵括弧で囲まれた体言止めの短文句であることによる。「寸雪<sup>すんせつ</sup>の国」とは、鈴木牧之の『北越雪譜』に見る「丈雪<sup>じょうせつ</sup>の国」（雪深い地元の越後）に対する暖地を表す言葉。

・一寸先は吹雪だった (山田紳 2014. 2. 19)

【解説】 主文はことわざであるとの理由付けに乏しい文であるが、元句はいろはカルタの文句として知られている。「一寸先は闇」をもじった政治漫画の寸言で、アベノミクスの先行きを不安視し、その能天気振りを揶揄した句。嘲笑(ちやうしょう あざ)や冷笑によって称讃されるのは政治漫画の特徴である。

・この日の朝、自民党総裁選について「野球は1人ではできない」と発言し、立候補のための推薦人20人の確保へ意欲を示したばかり。(2008. 9. 4)

【解説】 主文は、自民党の総裁選挙とプロ野球の始球式を前にした小池百合子の発言。〈挙党一致の全員野球〉を前提に、2つの行事を掛けたキレのよい発言が鍵括弧で括られている。元句は「喧嘩は一人ではできぬ」。

・この一強はいかにして生まれ、この国に何をもたらしているのか。それを深めるには、首相の権限を強めるための改革を積み上げた「平成の楼閣」に迫らなければならない。(山岸一生 2017. 2. 27)

【解説】 主文は鍵括弧で囲まれた体言止めによる短文句。元句は「砂上の楼閣」。なお、本文の後には、「楼閣とは、重層の建物で、政治的権威を示す建物を指す場合もあります」との解説文が見られる。

・リスクがない法律はない (井田良<sup>まこと</sup> 2017. 6. 16)

【解説】 文脈からすれば「悪法もまた法なり」が想起され、様式からは「朝の来ない夜はない」と同じ〈ない／ない〉表記によって印象深い。小見出しがことわざになり得る好例。

・食は薬なり (須藤朝代 2017. 5. 15)

【解説】 主文は本のタイトル。副題には「塩梅よく摂る」とある。〈～は…なり〉の様式からは「食は広州にあり」が連想され、「医食同源」に思いが

飛ぶ。

「悪法もまた法なり」、「事実は小説より奇なり」に見られるように、ことわざを抽出するには、文中の〈なり〉に注目しておきたい。また、これに対する「親孝行したい時分に親はなし」のように、〈なし〉の存在にも気を配りたい。さらに〈あり〉と〈なし〉の両方に着目すれば、遊び心に富んだ「あるときは蟻があり、ないときは梨もなし」に行き着く。

- ・「小が大をのむ」日本板硝子の強気の裏には、上得意先である日本の自動車大手の世界戦略の威勢を借り、国際企業として飛躍を図るという計算がある。(2006.5.8)

【解説】板ガラスの分野で世界6位の日本企業が、同3位の英国企業を買収したという記事。主文は、元句の“Big fish eat small fish.”(「弱肉強食」)を覆し、「山椒は小粒でもびりりと辛い」を彷彿<sup>ほうふつ</sup>とさせる句である。

このように、ことわざを発掘するには、音と音数の似た既知のことわざへの思いやりと、意味内容における逆転の発想が欠かせない。なお、〈威勢を借り〉からは「虎の威を借る狐」が連想されるが、本文に限るならば〈ずるい〉というイメージは払拭すべきであろう。

#### 4. ことわざにふさわしい文章

ことわざとは認識されていなくとも、それと呼ぶのにふさわしい短文句を紹介する。本章におけるアプローチが、眠っている鉱脈の発掘をめざす本稿の最重要課題であると言っても過言ではない。なかでも、本章(2)の再編集すれば完結する文言への解説は、創作ことわざの取り組み方と習作という方法論としても参考となろう。

(1) 独立もしくは完結している文言

- ・下町の深川に暮らす。職人の一途さを感じる街を、成功者が集う銀座とともに愛してきた。「詩とは思想と文体の結合。二つの街で学んだ人生観が私の文体」(山口真理子 2017.4.7)

【解説】 主文は観念的・哲学的で面白味は薄いですが、文芸の観点からは味わい深い。文言の組み合わせの妙が体言止めの短文に活き、ことわざとしてのキレを生じている。

- ・幕の内弁当は小さな世界、限界の中の無限なんです。俳句が五七五のルールの中で詠もうとするのに似ている。(栄久庵憲 2008.8.2夕刊)

【解説】 〈日本の発想の原点は「幕の内弁当」とおっしゃっています〉というインタビューに応えた文言。主文のように、架橋力に秀でた職人の高度な哲学がわざ言語を創出し、ことわざを鍛えてくれる。棋士の宇宙は盤上にあり、噺家は座布団の上で無限を語る。《幕の内弁当は限界の中の無限》を形づくっているのである。

- ・強引さや身びいきなど何かにつけて「ジャクソン以来」と評されるドナルド・トランプ氏が大統領に就任した。これほど大勢が抗議集會に集まった就任式が過去にあったとは寡聞にして知らない。(2017.1.22 天声人語)

【解説】 主文は鍵括弧内の体言止め。しかも、その前置語には〈何かにつけて〉、後置語には〈と評される〉とある。これにより両者に挟まれた主文は一般化された比喩、すなわち、ことわざとしての役割を演じている。

- ・小説は作家が歌う歌だと思っています。(森村誠一 2016.6.8夕刊)

【解説】 主文は比喩であり、体言止めにて完結している。また、後続する〈だ〉に強い支持力が感じられる。ことわざは〈譬え〉と称されていたこと

は先ほど述べた。これほどに《比喩はことわざの命》なのだが、主文の難点は比喩として架橋された距離がやや短く、意外性に欠けること。

・私は「美姿勢の秘訣は骨盤にあり」とよく話す。(谷英子 2014. 2. 19)

【解説】後置語の〈よく話す〉により、経験則としての確信が主文に反映されている。鍵括弧内の主文は、ことわざの型のひとつ、「～は…にあり」で結ばれており、「食は広州にあり」「美は乱調にあり」などが想起される。

・人は小さなうそより大きなうそにだまされやすいと平然と述べ、大衆の理解力は小さいが忘却力は大きいなどと、寄り添うふうをしながら徹底して大衆を蔑視した。(福島申二 2017. 1. 22 「日曜に想う」)

【解説】最初の主文は、否定されるべき意味内容を短文で言い切っている。この仕掛けが警句としてのことわざらしさをもたらしている。2番目の主文は、大小を対比した短文であり、そこにことわざの様式美を見出すことができる。いずれも鍵括弧書きされるべき短文であって、主文を掘り起こすためにさぐり、切り取る位置を見定める能力が問われる場面である。

なお、本文の前に、「…ヒトラーも、『ポスト真実』の土壌から台頭した独裁者だった」とある。ポスト真実とは、「平たく言えば、事実や真実よりも感情的な言辞や虚言、あるいはその情報に民意が誘導されていく状況をさしている」とも記されている。

・師匠の教えは「まわしは小指で取れ」だった。小指からしぼるようにまわしを狙うと、脇が締められ、相手を引きつけられる。(2017. 5. 13)

【解説】主文は〈師匠の教え〉という前置語に導かれた鍵括弧付きの短文。スポーツ／運動競技における「わざ言語」「指導言語」が、ことわざ（言技／事業）として認められる好例である。論理の合理性と動作の主観的イメージが同時に得られるところに、科学的言語の弱点を補う機能が見られる。



- ・坂口由紀子プロデューサーも「特に食が人を作る、という考え方が気に入っている」と共感している。(岩本哲生 2009.3.18 「BS アングル」)

【解説】 テレビ番組の紹介記事。常識的には食は人が作るものであると理解されているが、この表現を逆手にとった着眼点にことわざらしさを窺うことができる。

〈作る〉が〈つくる〉と記されておれば、主文は人格をも養うというほどに食は大切である、と受け入れることができよう。いずれにせよ、食育の大切さが凝縮された文句である。

- ・味覚は、精神や官能を喚起する触媒でもある。だからこそ塚本邦雄にとって、触れたいときすぐ指に届く宝の函<sup>はこ</sup>、それが味覚だったのではないだろうか。(平松洋子 2010.7.25)

【解説】 『ほろにが菜時記』の書評。主文に見る文言の取り合わせと独立した記載法に、ことわざの〈わざ〉が光っている。ことわざらしさをさらに強調するためには、句読点は削除して〈触媒〉で止めるか、〈触媒である〉としたい。

## (2) 再編集すれば完結する文言

- ・野に雑草という草はないように、工場には雑用という名の仕事はない。(小関智弘 2017.5.27 「折々のことば」)

【解説】 主文の撰者：鷺田清一は、「野に雑草という草はない、との趣旨の昭和天皇の言葉はよく知られているが、…」と冒頭で触れている。本文は、この〈よく知られている〉という前置語の威力を前面に出し、〈ように〉という比喩表現で両句を結びつけて主文のことわざらしさを浮上させている。

なお、対句形式に着目するのも、ことわざ発掘法のひとつであることからすれば、前述した〈あり〉〈なし〉にも思いが及ぶ一句である。習作例として、《雑草という草はなく、雑用という事もなし》を挙げておく。

- ・IPCC が最新の知見の弱点を隠さないのは、科学が進歩することに自信があるからだろう。(尾関章 2008.8.29 夕刊 「窓」)

【解説】 主文の魅力は、〈弱点〉対〈自信〉のように、ことわざにしばしば見られる相反言語で構成されていること。しかし、饒舌気味であることから〈科学〉を削除して一般化し、ことわざのように記憶に残り、口頭に上りやすい形にしておきたい。

本文に続き、〈このときのカギになるのが「複雑の中から単純な部分をとりますこと」(島伸一郎)と記されている。ことわざ創りも科学論文も、無関係に関係性を見出し、単純化して口調を整えることに尽きそうである。

これらを踏まえ、汎用性を備えたことわざに改作したものが《弱点を隠さぬ自信》である。この句をもとにして本文を書き改めた一例を示すと、〈IPCC の最新の知見には《弱点を隠さぬ自信》があり、それが科学の進歩につながっている〉となる。

- ・歴史に学べば、なにごとも始まりの小さな芽の中に結末が包摂されているのに気づく。(福島伸二 2017.4.16 日曜に想う「平和の扇動者」古びない)

【解説】 前置語の〈なにごとも〉が、ことわざにふさわしい一般化された文言が続くことを暗示している。この主文をさらに昇華するには、芽を形容する〈始まりの小さな〉を削除し、受身表現ではなく能動的な《結末は芽の中にあり》としておくのがよさそうだ。

- ・不安のありかについて「たとえるなら『一度きりの渡し舟に乗り遅れたらやばい』という計り知れない焦燥感・切迫感」と書いている。(2017.6.1 天声人語)

【解説】 就職採用試験に関する本(著者：双木あかり)の一節。前置語に〈たとえるならば〉とあり、主文が比喩であることが分かる。また、二重鍵

括弧に収められていることから見ても、ことわざの要素を具備していることは明らかである。

主文の〈やばい〉は論外としても、〈一度きりの渡し舟に乗り遅れるな〉では説明的。ここは思い切って《一度きりの渡し舟》と改作し、想像余地を残しておきたい。

- ・まさに、道具は大ゲサに言やあ命みたいなもんだ。(曾我豪 2017.4.30 日曜に想<sup>おも</sup>う「自民党さんよ、あると重宝だよ」)

【解説】『職人衆昔話』(斎藤隆介, 文春学芸ライブラリー)から引用された文章の直後に記された言葉。

本稿の目的は蔓を手繰って芋を掘り当てることであるが、本文にはその芋を掘り起こすための蔓が伸びている。文頭の「まさに」という前置語と、主文中の「大ゲサに言やあ」「みたいなもんだ」が蔓にあたる。更に、この目的にふさわしい芋を育てるには、「大ゲサに言やあ」を削除し、「みたいなもんだ」を簡潔な「如し」に言い換え、《道具は命の如し》《道具は命》と極言化してみたい。

- ・絵画についてだが、作家の開高健が「感動のきっかけは最初の一瞥にある」と書いていた。(2114.2.19 天声人語)

【解説】主文は引用であることから、鍵括弧に入っている。また、完結した意義深い短文であることから、ことわざ仕様であることが認められる。この主文から削除できるのは、〈きっかけ〉と〈最初〉。いずれか一方を残したい気もするが、《感動は一瞥にあり》とスリムにしておくのがよいだろう。

- ・「素質は稀勢の里より上。火山のような、未知数の素質を持っている」。(岩佐友 2017.5.31 夕刊)

【解説】先代師匠(故・元横綱隆の里)の高安に対する評価。主文中に似

た状態や同じ様を表す〈ような〉が用いられていることが注目のポイントである。主文に更なることわざらしさを求めるならば、読点と〈数〉、〈を持つている〉を削除し、《火山のような未知の素質》と体言止めにしておきたい。

余談ながら、父栄二さんは、部屋から度々逃げ出した息子に、「石の上にも三年」「違う道も厳しいぞ」と諭したとある。

## 結 び

切り抜いておいた新聞記事や直近のものを無作為に取り出し、分類・解説を試みた。採用した新聞紙は一社であり、その時期にも偏りがある。また、分類項目が最初からあった訳ではなく、記事を読みながら項目を加えていったに過ぎないが、なんとか杣道らしきものができたと思う。この先は依然として荒野だが、資源は豊富にあるので、今後はいっそう発掘に努めたい。

さて今回、少々無謀であることを承知で執筆を試みたのには理由がある。2017年3月末日をもって定年となった筆者は退職1年生であることから、恐れを知らぬ振りをしてチャレンジすることを思い立った。

このように振る舞う根底には、伝承ことわざを生活実感として学ぶとともに、積極的に掘り起こして暮らしに活かしたい、という願望があった。発掘場所を新聞にしたのは、日常の多様な〈こと＝言・事〉や〈わざ＝技・業〉に出合えるツールである、と考えたからである。

さらにその深層には、ことわざは自然に形づくられ、意図的にも創られているということを理解してほしい、という意味もある。とりわけ、創作ことわざは「わざ言語」「指導言語」として、体育・スポーツ教育における大きな可能性を秘めていることや、自分の言葉を紡ぎ思いの丈を表現すれば、精神的な安定にも寄与する、ということを経験したのである。

それでは、以下に〈ことわざ鉤脈発掘法〉の着目事項を記し、序のまとめに代えることとする。ことわざを再定義する一助になれば幸いである。

1. 文章の外観に注目する
  - (1) 独立した短文である。
  - (2) 鍵括弧等で囲まれた短文である。
2. 見定めた文章を説明する前置語や後置語等に注目する
  - (1) ことわざ、格言、家訓等の表記が見られる。
  - (2) 文章を浮彫りにする〈案外〉、〈まさに〉、〈よく言ったものだ〉等の文言が見られる。
3. 見定めた文中の文言や様式に注目する
  - (1) 体言止めや命令口調、〈なり〉や〈あり/なし〉といった文語調でキレのよさが見られる。
  - (2) 〈ごとし〉、〈よう〉といった、何かに譬えるための文言が見られる。
4. 文意に注目する
  - (1) 普遍性に満ちた内容が見られる。
  - (2) 意外性に富んだ内容が見られる。

#### 〈注〉

- 1) G・ミーダー、D・ホルムズ『子どもとことわざは真実を語る ―― ことわざの叡智を小学4年生に教える ――』(創英社/三省堂), p. 141, 2017
- 2) 藤井乙男『諺の研究』講談社, p. 20, 1978

(やまぐち・まさのぶ 名誉教授)